

## 農村風俗を描くサンドの社会的視線

—信仰・女性・ダンスについて—

吉 田 綾

は じ め に

故郷ペリ地方の農民を理想的に描いたジョルジュ・サンドのいわゆる「田園小説」は、その牧歌的な表面の裏に作家の一貫した社会主義思想を秘めている。サンドは他のロマン派作家同様、あるいはそれ以上に古来の伝説や風習に目を向け、息子モーリス<sup>(1)</sup>のデッサンを添えた『ペリ地方の風俗習慣』<sup>(2)</sup>、『田舎における夜の幻影』(共に1851年)<sup>(3)</sup>、『テーブルを囲んで』(1856年)<sup>(4)</sup>、『田舎の伝説集』(1858年)<sup>(5)</sup>、『ある村の周辺の散策』(1859年)<sup>(6)</sup>など小説以外のジャンルでも関連の作品を残した。しかし、自然と共存した日々の暮らしを営む農民への賛美と共感、また都市生活者が失ってしまった素朴な風習への懐古趣味的な憧れだけが、これらの文章を書かせたのだろうか。サンドは農村社会を手ばなしで称賛しているわけではない。貧窮から人々を救うために産業の育成や教育が必要であること、農村も一つの社会であるがゆえに、階級差や偏見などの矛盾をはらんでいることを指摘している。しかし、そのような社会主義的主張を直接的に作品にするわけにはいかない事情が、例えば随想『ある村の周辺の散策』を連載した「ル・クリエ・ド・パリ」<sup>(7)</sup>の編集長フェリックス・モルナンにあてた手紙からうかがえる。

《(...) je ne voyais aucun moyen d'en venir à bout sans parler politique, et la politique pour la politique est justement prohibée

dans le feuilleton. Toute la vie sociale du paysan se rattache, en effet, à des notions plus ou moins justes sur l'état social général, (...). Bref, je suis presque certain que la *Chronique de village*<sup>(8)</sup> m'eût entraîné dans un champ d'épines, et vous ne vouliez que des fleurs.》<sup>(9)</sup>

このように出版社の意向や政治的事情から、社会思想的な内容を避けざるを得なかったこともあっただろう。しかし、サンド自身が農村習俗に特別な関心を抱いて作品にしたことも事実である。小論では、農村の信仰、女性と婚礼、祭りで踊るダンスといった角度から、作家の主義主張を考察したい。民間伝承を扱った随想においても、その一つ一つのテーマの選択ととらえ方に、彼女独自の社会的視線が感じられるからである。

## 1 農村の信仰とキリスト教

信心深いけれども迷信深くもある農民は、キリスト教の正統な規範からすると必ずしも模範的な信者とはいえない。しかし、迷信も風習も古代から土地に伝わり、住民の精神形成に影響してきた要素である。司祭は教区固有のバックボーンを無視して、画一的な礼拝を独善的に押し付けることはできない。『ペリ地方の風俗習慣』でサンドは、伝説や幽霊の類い、異教的な要素の強い儀式を紹介すると同時に、村人が教区司祭と対立したり、あるいは表向きはその教えに従いながら裏で従来の民間信仰を守り続ける姿を描いている。

《Plusieurs (curés) défendent d'employer le buis béni au coin des champs comme préservatif de la grêle, et de faire des pèlerinages pour la guérison des bêtes ; mais on ne les écoute guère, on les trompe même. On extorque leurs bénédictions comme douées d'un charme magique, en leur signalant un but qui n'est pas le véritable.》<sup>(10)</sup>

ここでサンド個人が宗教と、どのように関わったのかをふりかえっておこう。カトリック教会から危険分子とみなされ、無宗教者の烙印を押された作家だが、彼女が受け入れられなかったのはキリスト教そのものではなく、司祭の存在である。聖職者至上主義と、プライバシーを侵害する懺悔制度に疑問を感じて教会を離れはしたが、少女時代に修道院生活を送って以来、常に信仰の道を模索していたようである。以下は自伝『我が生涯の歴史』で述べていることである。

《Ma religion (...) n'a jamais varié quant au fond. (...) La doctrine éternelle des croyants, le Dieu bon, l'âme immortelle et les espérances de l'autre vie, voilà ce qui, en moi, a résisté à tout examen, à toute discussion et même à des intervalles de doute désespéré.》<sup>(11)</sup>

だからこそ宗教改革家ラムネー<sup>(12)</sup>と出会ったとき、人間性を尊重するその教えに即座に心酔したのだろう。彼はローマ教会から破門されてなお、「司祭は絶対的な神学の規定に従うよりも、人間とキリスト教徒の良心の自然な本能の声に耳をかたむけ」るべきだと説いた<sup>(13)</sup>。

話を本筋に戻そう。サンドは『ベリ地方の風俗習慣』で農村にキリスト教が入ってきた時代のことにふれている。キリスト教以前の習慣や崇拜物が生活のあらゆる場に根をおろしているベリ地方で、神父たちは供物や花で祭壇を飾ることを禁じ、偶像崇拜的な信仰を徹底的に追放しようとする。しかし、長年培われてきた精神性を外側から強引に変えることなど所詮無理な話である。信仰を「矯正」することの理不尽に関してサンドは次のような見解を示している。

《Mais avec le peuple attaché au passé il faut toujours transiger. Il est plus facile de changer le nom d'une croyance que de la détruire. On apporte une foi nouvelle, mais il faut se servir des anciens autels. C'est ainsi qu'en beaucoup d'endroits les pierres druidiques ont trav-

ersé la domination romaine et la domination franque, le polythéisme et le christianisme primitif, sans cesser d'être des objets de vénération, et le siège d'un culte particulier assez mystérieux, qui cache ses tendances cabalistiques sous les apparences de la religion officielle. <sup>(14)</sup>

土地の信仰を考慮せず、教会組織の正統を強要することはできない。教区民の精神構造を理解できる司祭ならば、起源がヘブライであろうとヒンドゥーであろうと、おそらくは様々な宗教が混合した「清めの水」の儀式を執り行つて、怪我や病気を癒すものだ。土地の個性と精神を尊重する聖職者をサンドは評価する。

自然界の事物に神が宿っていると考える信仰対象の例として、テルム神 (Terme) の伝承があげられている。これは土地の境界に地中深く埋められた大きな石である。隣り合った土地の所有者間でその境界線に関する揉め事が起きると、村人たちはこの神様を掘り出してお伺いをたてるのである。この信仰を一掃するのが司祭にとって最も困難な仕事だったと随想で述べられているが、わずかばかりの所有地への農民のこだわりをサンドは次のように説明している。

《Son champ, son pré, sa terre, voilà son monde. C'est par là qu'il se sent affranchi de l'antique servage. C'est sur ce coin du sol qu'il se croit maître, parce qu'il s'y sent libre relativement, et ne relève pas que de lui-même.》<sup>(15)</sup>

狭いながら、誰にも支配されず自由を保証される領域の存在が、人間の精神にとっていかに大切かということを訴えているのではないだろうか。農民の生活は決して楽ではなかった。実際、「19世紀の前半、全人口の70～75%を占めていた農民層の中で、その80%以上が自分の土地だけでは生活できない者

と全く土地を持たない者であった。』<sup>(16)</sup>彼らが物質的にも精神的にも土地に固執するのは必然である。それゆえに、税金を情け容赦なく割り当てる測量師や政府への反発も強まるのだろう。『魔の沼』の婚礼の儀式で演じられる芝居にキャベツの植えかえを指揮する「技師」が登場する。恣意的に命令を下し、仕事を長引かせる嫌われ役である。サンドはこの風刺的な役回りについて次のような説明と解釈を加えている。

《Ceci est-il une addition au formulaire antique de la cérémonie, en moquerie des théoriciens en général que le paysan coutumier méprise souverainement, ou en haine des arpenteurs qui règlent le cadastre et répartissent l'impôt, ou enfin des employés aux ponts et chaussées qui convertissent des communaux en routes, et font supprimer de vieux abus chers au paysan.》<sup>(17)</sup>

オリジナルでは存在しない役がつけ加えられた背景には、政府に対する強い不信感があったと推測できる。政治と無関係の農村習俗を扱いつつ、作家は政治の不寛容や不正義を攻撃している。

## 2 女性の仕事

サンドは『ベリー地方の風俗習慣』で婚礼の儀式にページを割いているが、その際、女たちの仕事についても一言のべている。

《Jusqu'au mariage, les filles sont pasteures ou servantes dans les métairies et dans les villes. Dès qu'elles ont une famille, elles ne quittent plus la maison, elles font la soupe, filent, tricotent ou rapiècent. Tout cela se fait si lentement et si mollement qu'il y a bien du temps perdu, et qu'on regrette l'absence d'une industrie qui les occuperait et

les enrichirait un peu, sans les arracher à leurs occupations domestiques.》<sup>(18)</sup>

家事労働を軽視するわけではないが、サンドは女性が働いて収入を得ることができる場が必要だと考える。収入があるということは貧しい生活を支える以上に、精神的な自由を守るための助けとなる。随想ではこれ以上のフェミニズム的発言を控えているので、女性の職業を一つのテーマにすえた小説作品から考えよう。

舞台は農村から離れるが、晩年のサンドが孫娘の教育のために創作した童話『ピクトルデュの館』に裕福なブルジョワの娘が登場する。少女は職業画家になることを夢みているが、父親フロシャルデは娘を「お嬢様」に育てたいと考える。

《Dans ce temps-là, on ne recevait une éducation d'artiste que pour arriver à gagner sa vie, et Flochardet, étant riche, pensait à faire de sa fille une vraie demoiselle, c'est-à-dire une jolie personne sachant s'habiller et babiller, sans se casser la tête pour être autre chose.》<sup>(19)</sup>

しかし少女は、コルセットで体を締めつけられ、着せ替え人形のように扱われると、たちまち病気になる。賢明な医師が彼女を自由にさせておくようフロシャルデに忠告する。

《(...) Surtout ne faites pas d'elle un petit mannequin à essayer des costumes, c'est une fatigue pour elle et non un plaisir. Laissez sa taille et ses cheveux libres, (...)》<sup>(20)</sup>

修練の後、少女は職業画家として成功し、破産した父親を助けるまでになるのだが、これと対照的にサンドは働いて収入を得ることを恥ずかしいと考える

没落貴族を登場させる。住居の修繕費用を工面できないほど生活が困窮しても、仕事をしようとしないう誇り高い侯爵はこう訴える。

《Vous comprenez que je ne pouvais pas faire moi-même le métier de marhand!》<sup>(21)</sup>

サンドは女性が働くことの是非について、多かれ少なかれ読者に考えることを促している。そして、多くの場合、『ピクトルデュの館』の少女が体の自由を奪う服装に精神的束縛をおぼえて苦しんだように、登場人物の装いは暗示的な意味をもっているように思われる。

『ヴァランティエヌ』では、村の野外パーティーに「借り物」の衣装で出かける農家の娘が登場する。娘をけばけばしく飾り立てた母親は満足げに言う、

Fais la dame, ma fille ; tu a été élevée pour ça : c'est l'intention de ton père ; tu n'es pas pour le nez d'un valet de charrue, et le mari que tu auras sera bien aise de te trouver la main blanche.<sup>(22)</sup> (下線筆者)

「白い手」とは、もちろん労働を知らない手を指すのだろう。非活動的な衣装は、この母親が理想とする無為の生活を象徴している。場違いな装いを凝らした娘は周囲の非難を浴びるが、母親の信念は変わらない。サンドを「モードの女商人」と揶揄したスタンダールは、『ヴァランティエヌ』について、衣類とその着こなし方の描写だけが強みで、哲学的なこととなると全くとるにたりない作品だと酷評した<sup>(23)</sup>。しかし、衣装の選択は働くことに対する登場人物それぞれの意識を暗に示していると解釈できないだろうか。家庭教師デシャルトルのすすめで乗馬の練習に男児服を着たサンドは、パリで裁判の傍聴席や芝居小屋へ出入りする自由を得るために男装を利用した。作中人物の服装描写に少なからぬページを割くのは、サンド独自の社会思想が関与しているからだろ

う。

### 3 村祭りのダンスの社会的役割

毎日つらく単調な労働に明け暮れる農民にとって、祭りや祝いごとは恰好の気分転換である。『愛の妖精』で描かれる聖ヨハネの祭りは、農家の奉公人や小作人の契約を結ぶ機会でもあった。しかし日頃、娯楽の少ない農村で人々が楽しみにしていたのは御馳走、音楽、ダンスの要素であろう。特にダンスはサンドの作品のなかで重要な役割を果たしている。ここでいうダンスとはフランス中部の民族舞踊であるブーレのことで、サンドは次のように解説している。

《C'est un mouvement doux chez les femmes, accentué chez les hommes, très monotone, toujours en avant et en arrière, entrecoupé d'une sorte de chassé croisé. C'est quasi impossible à danser, si l'on n'est pas né ou transplanté depuis longtemps en Berry. La difficulté, dont on ne se rend pas compte d'abord, vient du sans-gêne des ménétriers, qui vous volent, quand il leur plaît, une demi-mesure ; alors, il faut reprendre le pas en l'air pour rattraper la mesure.》<sup>(24)</sup>

一見、単純で素朴な民族舞踊にも、従うべき社会慣習や踊り手の思惑がからんでくる。まずは、踊られなければ社交に加わることができないから、若者たちは練習をしてステップを覚えなければならない。つぎに誰を相手に踊るかという問題がある。「助けてもらったお礼に何でも言うことをきく」というランドリーに対して、ファデットは聖アンドッシュのお祭りで一日、自分とだけ踊ることを約束させるが、この発言には単に「踊る相手がほしい」という以上のメッセージが含まれているのではないだろうか。村の人々の考え方、この村社会でファデットが置かれている状況を考えるとき、彼女のもっと強い意志が見えてくる。

《-(...)voici ce que je veux : Vous me ferez danser trois bourrées après la messe, deux bourrées après vêpres, et encore deux bourrées après l'Angélus, ce qui fera sept. Et dans toute votre journée, depuis que vous serez levé jusqu'à ce que vous soyez couché, vous ne danserez aucune autre bourrée avec n'importe qui, fille ou femme.》<sup>(25)</sup>

器量よしと評判のマドレーヌと踊ることを楽しみにしていたランドリーは、この約束に困惑してしまう。シモーヌ・ベルナル＝グリフィットは人間関係や精神的、肉体的要素が規定するダンスパーティーを「社会的相互作用」が働く空間と定義する<sup>(26)</sup>。ここでは農村のモラルが存在し、パートナーを固定することは相手が婚約者でない限り規則に違反する。『笛師の群れ』ではユリエルが伯母から次のような忠告を与えられる。

《-(...) on ne danse ici plusieurs fois de suite qu'avec une fille dont on a, en promesse, le cœur et la main.》<sup>(27)</sup>

結婚に発展するかもしれないし、そうでなくてもダンスが周囲の人間に「見られる」行為である以上、若者たちには自然と虚栄心が芽生える。相手選びに一種の階級意識がはたらき、自分と釣り合いのとれた相手を選ぼうと考える。ファデットと踊ることを、不体裁だと考えるランドリーの心理のうちにもそれと気づかない差別意識があるといえる。

《(...) elle (=Fadette) était si peu belle et si mal attifée, même les dimanches, qu'aucun garçon de l'âge de Landry ne l'eût fait danser, surtout devant du monde. C'est tout au plus si les porchers et les gars qui n'avaient point encore fait leur première communion la trouvaient digne d'être invitée, et les belles de campagne n'aimaient point à l'avoir dans leur danse. Landry se sentit donc tout à fait humilié

d'être voué à une pareille danseuse ; (...)》<sup>(28)</sup>

相手が他の女性に好意をよせていることを承知しながら、自分とだけ踊ることを強要するファデットの行為は非常に勇気ある恋の告白と解釈できる。彼女は自分が村人たちからどのような目で見られているのか十分に知っている。しかし、両親もなく体の不自由な弟をかかえて貧しい生活を強いられている人間を、援助するどころか、かえって「のけ者」にする社会を理不尽だと訴える。その反発がさらに人々の反感をかっていたのである。若者達がちやほやするマドレーヌに対抗するのも、世間への挑戦と解釈できる。

一方、ランドリーは村の評判も高い裕福な家の息子である。おなじ農村に暮らしていても、ランドリーとファデットの間には歴然とした「階級差」が存在した。

しかしこの壁は、二人が踊った祭りの日から徐々に取り払われていく。ランドリーの目にもマドレーヌの不誠実さが見えるようになり、同時にファデットの隠れた美質を正当に評価できるようになる。紆余曲折を経て、二人は周囲に祝福されつつ婚礼をあげる。そして今度は村でも一目おかれるような家庭を築きあげる。ファデットは不当に敷かれた「階級差」を自分の手で壊していったことになる。その第一撃が、あの一風かわった「ブーレの申し込み」だったのである。結果からすればランドリーは踊る相手を誤っていなかったことになる。

ダンスのパートナーを間違っはならない最たる人物は、婚礼の日の新郎である。サンドは『ベリ地方の風俗習慣』のなかで、敷布で全身を覆って姿を見分けられなくした四人の娘のなかから、新郎が花嫁をあてる儀式について書いている。もし間違えれば、その相手とだけ一晩中踊らなければならないのである。サンドはこの風習を『魔の沼』のジェルマンとマリの婚礼の場面でも引用している。

《Le fiancé ne devait les (=les quatre jeunes filles couvertes d'un

grand drap blanc) toucher qu'avec le bout de sa baguette, et seulement pour désigner celle qu'il jugeait être sa femme. On lui donnait le temps d'examiner, mais avec les yeux seulement, et les matrones, placées à ses côtés, veillaient rigoureusement à ce qu'il n'y eût point de supercherie. S'il se trompait, il ne pouvait danser de la soirée avec sa fiancée, mais seulement avec celle qu'il avait choisie par erreur.》<sup>(29)</sup>

サンドはベリ地方に古くから伝わるブーレを単なる懐古趣味からとりあげたのではなく、それを社会的な視線で分析し、作品のなかで効果的に使ったのである。

## おわりに

パリという都会も熟知していた作家だからこそ、客観的に農村風俗を見つめ、随筆や小説のモチーフとすることに成功しえたのだろう。古代信仰を受け継いできた基層文化を無視して、合理精神やカトリック的精神を強要することへの問題意識をサンドは提示している。同時に、農村を美化するのではなく一個の社会としてとらえ、そこに根強く残る偏見や貧富の差、女性や福祉の問題などを作品の背景に据えた。ベリ地方固有の舞踊や婚礼の儀式を民間伝承研究の立場から紹介しつつ、人間の行動と心理を作家は社会的な視点で分析していく。このような視線は、「社会主義小説」で権威主義を否定し、弱者にこそ目を向けるべきだとサンドに訴えさせた思想と、源泉を同じくするのではないだろうか。素朴で平和な田園を作品の舞台にしても、サンドは社会思想を排除することをしなかった。また、都市に対して文化的に下位とみなされた農村の魅力を描くことによって、「個性の尊重」を婉曲的に標榜しているともいえよう。

## 註

- (1) サンドの友人であったドラクロワを師として画家を志した。
- (2) *Mœurs et coutumes du Berry*.
- (3) *Les visions de la nuit dans les campagnes*.
- (4) *Autour de la table*, 1862年に上記二作品とあわせ同名で再出版されている。
- (5) *Les Légendes Rustiques*.
- (6) *Promenades autour d'un village*.
- (7) *Le courrier de Paris*, 週刊誌, 1857年9月1日号から10月20日号まで連載。
- (8) 当初はこの題名での執筆を依頼された。
- (9) *Les Amis de George Sand*, N° 1, 1978.
- (10) George Sand, *Promenades autour d'un village*, Tours, Christian Piot, 1984, p. 126. この版では *Mœurs et coutumes du Berry* も収録されている。
- (11) *Œuvres autobiographiques*, Pléiade, t. II, p. 94.
- (12) abbé félicité-Robert de LAMENNAIS, 1782-1854.
- (13) Louis Le Guillou, *Lamennais*, Desclée De Brouwer, 1969.
- (14) *Promenades autour d'un village*, op. cit., p. 123.
- (15) *Ibid.*, p. 123.
- (16) 山方達雄, 論文『ジョルジュ・サンドの「田園小説」における社会的意義』, フランス文学研究 (日本フランス文学会), 1959年。
- (17) George Sand, *La Mare au Diable*, Paris, Garnier, 1981, p. 171.
- (18) *Promenades autour d'un village*, op. cit., p. 117.
- (19) George Sand, *Contes d'une Grand-mère*, éditions de l'Aurore, Grenoble, 1982, p. 54.
- (20) *Ibid.*, p. 61.
- (21) *Ibid.*, p. 58.
- (22) George Sand, *Valentine*, op. cit., p. 33.
- (23) 長塚隆二, 『ジョルジュ・サンド評伝』, 読売新聞社, 1977年, p. 23.
- (24) *Promenades autour d'un village*, op. cit., p. 121.
- (25) George Sand, *La Petite Fadette*, Paris, Garnier, 1981, p. 115.
- (26) Simone Bernard-Griffiths, *Bals et danses champêtres*, Les Amis de George Sand, N° 21, 1999.
- (27) George Sand, *Les Maîtres Sonneurs*, Paris, Gallimard, collection 《Folio》, 1979, p. 359.
- (28) George Sand, *La Petite Fadette*, op. cit., p. 116.
- (29) George Sand, *La Mare au Diable*, op. cit., p. 157.